

【聖書箇所】

ルカ 11:1 イエスはある所で祈っておられた。祈りが終わると、弟子の一人がイエスに、「主よ、ヨハネが弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈りを教えてください」と言った。2 そこで、イエスは言われた。「祈るときには、こう言いなさい。『父よ、御名が崇められますように。御国が来ますように。3 わたしたちに必要な糧を毎日与えてください。4 わたしたちの罪を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を 皆赦しますから。わたしたちを誘惑に遭わせないでください。』」

詩篇130:1【都に上る歌。】深い淵の底から、主よ、あなたを呼びます。2 主よ、この声を聞き取ってください。嘆き祈るわたしの声に耳を傾けてください。3 主よ、あなたが罪をすべて心に留められるなら／主よ、誰が耐ええましょう。4 しかし、赦しはあなたのもとにあり／人はあなたを畏れ敬うのです。5 わたしは主に望みをおき／わたしの魂は望みをおき／御言葉を待ち望みます。6 わたしの魂は主を待ち望みます／見張りが朝を待つにもまして／見張りが朝を待つにもまして。7 イスラエルよ、主を待ち望め。慈しみは主のもとに／豊かな贖いも主のもとに。8 主は、イスラエルを／すべての罪から贖ってください。

1 祈ることは信仰の中核

今日から、ルカ福音書は、11章に入ります。礼拝で先程、共に祈りました「主の祈り」についての箇所です。祈ることは私たちの信仰にとって、とても大切なこと。祈ることなしに神を信じることはできないから。だから、聖書にはたくさんの祈りが記されています。その中でも「主の祈り」は、主イエスが弟子たちに教えてくださいました祈りであり、教会はそれを代々引き継いで祈ってきました。「主の祈り」は、キリスト者にとって、また教会にとって最も重要な祈り、私たちの信仰の中核をなす祈り。それだけに、丁寧に見ていきたい部分です。今週から暫く、ルカ福音書11章の主の祈りを見ていきます。

さて、皆さんは、どれくらい毎日の生活で祈っているでしょうか。ここには教会の礼拝に通いだして間もない方、洗礼をまだ受けていられっやらない方もいます。そもそも、祈ることが自分に必要だと思っていないかもしれません。祈らなくても生きていけるのではないかとそう考えても不思議はありません。信仰者でなければ、祈る事は非日常です。私自身も「自分には祈ることが必要だ、祈らなければ生きていけないのだ」と思い始めたのは、教会に通いだして暫くしてからでした。苦しい事があった時、祈りによって助けられてから、生活の中に祈りが入ってきて、私は変えられ続けたと思います。しかし、信仰生活を続けていて、忙しさのあまりに、祈らなくなった時もあったし、礼拝で当番にあたっている時も決まりきった言葉を口先だけで祈るということもありました。そういうことは皆さんも心あたりがあると思います。信仰生活を今からはじめようという人も、長く教会には通っている人も、ここで新しく「祈ることとはどういうことか」考えてみたいと思います。

2 祈る主イエス

「イエスはある所で祈っておられた。」とルカ福音書11章は始まります。ルカは共観福

音書の中でも特に、主イエスが祈る場面を多く描いています。そのご生涯の節目節目で主は祈っておられます。洗礼者ヨハネから洗礼を受ける時も祈っておられました(4:21)。重い皮膚病を患っている人を癒した事が噂となって広まり群衆が押し寄せた時も、その群衆を避けるように人里離れたところに行って祈っておられた。たくさんの弟子たちの中から十二人を選んで使徒と名付ける前の晩には、山に上り、ひとり夜通し祈られた…とルカは語ります。さらには、ペトロが初めてのキリスト告白をする前にも祈っておられました。主はペトロ・ヤコブ・ヨハネを連れて山に登られ、祈っている時その姿はまひるの太陽のように真っ白く光輝いた…とあります。遂に逮捕される直前には、ゲッセマネの園で、主イエスは血の汗を流すような祈りを天の父なる神にささげられました。「これから受けなくてはならない十字架の苦しみを取り去ってください、でも私ではなくあなたの御心となるように」と全身を投げ出して祈っておられます。逮捕され十字架にかけられた時、からだを裂かれる痛みに呻きつつ、苦しい息の中で父なる神に祈られます。「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは自分が何をしているか分からないのです。」三日後に甦られた時も、弟子たちの前で感謝の祈りをささげられました。主は祈られる方です。

3 荒野のキリスト

主イエスはどんなふうに祈っておられたのでしょうか。主が祈る姿を描いた一枚の絵があります。



「荒野のキリスト」という絵です。ごつごつした岩が広がる荒野、水平線は朝焼けに薄紅に染まっています。主はひとり岩に座り、目を閉じて手を組み、祈りに集中しています。静かに想いを神に向けて集中しているようにも見えるし、激しい苦しみを神に訴えているようにも見えます。この絵には、周りに弟子たちの姿はなく主おひとりです。しかし、主は孤独ではありません。主は単に自分ひとりで考えに耽っておられるのではありません。なぜなら、主は、父なる神と向かい合って対話しておられるからです。

私たちは、「祈り」というと、神に一方的な願いを申し述べるだけだと思いがちです。し

かし、「祈り」は、「神との対話」だと言われています。ちょっと難しい言い方をすれば、「人格的交わり」だということです。私たちは、誰かとお付き合いをする時、対話します。お互いに話を聴きあい、話し合い、お互いの事を知っていきます。自分だけ話をしても、相手の話しを一方的に聴くだけでも

対話にはなりません。仲良くもなれません。対話をとおして相手と共に時間と空間を共有することで、

人と人との交わりが生まれる、関係が生まれるのです。祈りとはそのようなもの。神と私たちとの対話であり、交わりだということです。そうして、私たちは、祈りを通じて、神との関係を強めていきます。だから、私に祈りは必要ない、祈らなくても生きていける…とどこかで思っているとしたら、それは、自分は神とは関係なく生きていける…という事になるのです。

4 「父よ！」

祈りは神との対話。対話の最初は、相手呼び求める事です。最初の呼びかけには、自分と相手との関わりをどのように捉えているかが現れます。例えば、学校の先生に向かって、「〇〇先生」と呼びかける時、相手を「先生」と捉え、先生としての〇〇さんとの対話を始めたいと願っているのでしょう。

主イエスは、「アッバ」と天の父なる神を呼んで祈り始められます。「アッバ」とは、幼い子どもが自分の親を全幅の信頼をもって呼び求める言葉。「アッバ、お父ちゃん」で始まる祈り。それは当時の人々にとっては衝撃的なものでした。今日の聖書箇所でも弟子のひとりが「洗礼者ヨハネが弟子たちに教えたように私たちにも祈りを教えてください」と言っていますが、洗礼者ヨハネの弟子だけでなく、当時のユダヤ人たちは、祈りを律法学者など自分たちの師匠から教わっていたようですが、彼らは、長い修飾語をつけて神を呼んでいました。「天地をお造りになり、統べ治めたまい、我らイスラエルの民をエジプトの奴隷状態から救い出してご自身の民となしたまい、目の瞳のように愛してくださる偉大にして憐れみ深い並ぶ者なき唯一の神よ」という風に。人々はそういうふう呼びかけて祈り始めることが、立派な祈りだと思い、神に聞き届けられるものだったようです。

私たちも似たような祈りをする時があります。よそ行きの言葉、体面を取り繕う言葉で祈りとなることがあります。神に向かって祈るのではなく、人に聞かせることを意識し始めるからでしょう。しかし、それでは本当の祈りにはならないのだと、主は「父よ！」と祈り始めることで私たちに教えてくれているようです。幼子にとっては、父親がどんな肩書きを持っていてもそんなことは関係ありません。「お父ちゃん」は「お父ちゃん」。肩書きなどを並び立てて呼ぶことなどあり得ませんし、言葉を取り繕う必要もありません。幼子が自分の親を信頼込めて呼ぶとき、肩書きをつけてよそゆきの言葉で呼びかけるとしたら、奇妙でしょう。主イエスは目を天に向けて、あるいはうつむきつつ、いきなり「アッバ」と父を呼び、祈り始めました。その神とのあまりの親しさに、当時の人々は度肝を抜かれるほどびっくりしたのです。

5 「我が子よ」との呼びかけ

そして、主イエスが呼ぶように「アッバ！お父ちゃん」と呼べるのが、私たちクリスチャン

です。しかし、私たちの方から「アッバ、お父ちゃん」と呼び始めたものではありません。神の方から、「わが子よ」と呼びかけを受けたのです。いつ呼びかけられたのか。

イエス・キリストの十字架と復活を通して、神は私たちに向かって、「愛するわが子よ」と呼びかけられます。ご自身の独り子に私たちの背きの罪を肩代わりさせ十字架に滅ぼし、そして三日目に新しい命によみがえさせる事により、私たち被造物である人間への愛を神は示されたからです。私たちが主イエスの十字架と復活を受け入れたとき、見えないイエスさまの霊、聖霊が与えられて、私たちは新しい命に生まれ変わり、「わたしの愛する子よ」と自分を求める神の呼びかけを聴く者とされるのです。だから、私たちは「お父ちゃん」と答えつつ、その胸の中に飛び込むことが出来ます。神のもとで得られる幼子の安心、平安、喜びを味わうことが出来るのです。それがクリスチャンに与えられた「救い」というものだ、聖書は語ります。そして、それは本当のことだと私も思います。

6 父と呼べる人をもつ

神を「お父ちゃん」と親しく呼べることは幸いです。ある牧師が語っていたひとりの女性の話の思い出します。その牧師は、祈ることを人々に勧めていました。「人前ではなくて密かに、ひとりひとりの生活の中で祈り始めてください。そうすると、神が今も生きて働いていることが分かります。」と。そう牧師は繰り返し、まだ洗礼を受けていない、でも神を求めて礼拝に出ていた人たちに語ったそうです。ある時、ひとりの女性がその牧師にこう言いました。「先生に言われて祈ろうと思うのですが、なかなか祈れない。本当に困った。けれども先生、とうとう言えたのです。私、『天のお父様』と言えたのです。」よほど嬉しかったのでしょう。いった途端にもう言葉が詰まってしまって、ぽろっと泣き出したそうです。この女性は、「お父さん」と神に向かって声をだした時、「なんだい？」と聞き返す神の愛を感じた、ああ、この方こそ自分が全幅の信頼を寄せることができる本当の親だ…と実感した、やっとやっと父と呼ぶべき人を父と呼べた、嬉しかったのだと思います。

かに祈るのですから、願い事があるのです。願い事が叶うことを目的として、人々は祈り始めるかもしれません。でも、本当に願い事が叶うことが私たちの本当に求めていることでしょうか。人は、例え願っている具体的な事柄がかなわないとしても、自分の呼ぶかけに応じて耳を傾け、思いや願いを無条件に受け止めてくれる方がいる…とわかった時、心からの安らぎを感じることができるのではないのでしょうか。

だから、私も勧めます。礼拝にきはじめて間もない人も、信仰歴の長い人が、心から祈ることから遠ざかっている人も、是非、ひとりひとりの生活の中で祈っていただきたいと思います。人前だけではなく、ひそかに祈って欲しいのです。「父よ」と呼びかけて祈らなければ、父である神というお方が分からないから。神が生きて働いておられることをわかるために祈って頂きたいです。

7 言葉

祈ることは、私たちのことを私たち以上に深く愛してくださる父なる神との対話です。交わりです。言葉があります。対話に不可欠なものは、荘厳な雰囲気や醸し出す音楽も美しい衣装も、神秘的なお香ではなく、言葉です。それも表面的な言葉ではなく正直な言葉。最も私

たちが正直になれるのは、切羽つまった時でしょう。

自分の力ではどうしようもない時、辛い時、苦しい時、「助けて！お父ちゃん」と叫ぶ、いや、「お父ちゃん！」だけでいい、いやいや、声に出さなくとも、心で「イエスさま、お父ちゃん」と呼び求めるだけでいいのです。父なる神が呼び求める自分に向かっておられるのがわかると思います。その時わからなくても、必ずわかる時が来ます。

そう私たちが最もよく祈れるのは、切羽つまった時だ…ということは、確かです。実は私たちは何を祈ればよいのか分からない存在なのです。何が自分に本当に必要なのか、自分はいったいどういう状況なのか、神からはどう見えるのか、分かってないのです。しかし、父なる方は、主イエスは、私たちのことを誰よりもよくご存知です。私たち自身よりもご存知です。ちょうどひどい病気になっている幼子を見る親のように私たちをご覧になっています。この幼子は自分のどこが傷んでいるのか話すこともできません。しかし、大きく見開いた助ける目をもって親をみつめます。親は、我が子が何もいうことができなくても、何が彼を痛ませているかを知っており、そのために適切な場所に手をあてることができるのです。父なる神は、この親のように憐れみ深いお方です。助けを求める者を見捨てることなく答えてくださるのです。だから、私たちの祈りは、私たちが正しく適切な言葉で願いのべることに依存していないのです。ほんとうに助かります。私たちは、自分たちの状況を正確に知らなくても、よく整った明瞭な言葉で祈ることができなくてもいいのです。父なる神は私たちの求める前に、私たちを知ってくださり、私たちをご自身の慈しみの中にいれてくださっています。「父よ」という呼びかけにはそのような意味があります。

8 待ちつつ祈ること

しかし、私たちの祈る相手は神であります。私たちの自由になる方ではありません。時に私たちは、神からの返事を待たねばならないことがあります。今回の説教準備の中でポーランドの司祭・トゥヴァルドフスキーという人の『あなたが祈る時、神はあなたの中で息をなさる』という題名の詩集を知りました。祈りの詩集、現代の詩篇のようなものらしいのですが、次のような詩があるそうです。

「祈るなら、ちょっと待たねばなりません。

すべてのものには時があります。

預言者はそれを見抜いています。

絶えずおねだりばかりしては、望みに生きることができません。

驚くべきことが熟してみのりをもたらすのは、なお将来のこと。

まだ成就していないこと、それは必ず出来事になります。

主はそれをすべてご存知です。

夜の只中であつても。

忙しがり屋は、あんなにせわしくどこへ行くのでしょうか。

愛は信じ、友情は理解します。

待つこともできないのなら、祈らないでください。」

ポーランドは、大国であるロシアとドイツに挟まれた弱小国。その歴史は侵略を繰り返される苦難の歴史、自由を奪われ他国に支配されるつらい日々を送ってきた人々の歴史です。そんな中で民衆の救いを求め、民衆と共に生きた司祭が祈った詩。特に印象

深いのは「待つこともできないなら、祈らないでください」。祈りつつ待とう、待ちつつ祈ろう…もう辛抱ができなくなって心が諦めに傾いたり、苛立ったりした時には気をつけようもう一度座り直して祈ろう。もう待つこともできないというなら、祈らないでください…厳しい言葉のようですが、勿論、待ちつつ祈ることを勧めているのです。励ましているのです。辛いこと苦しいことが続き祈りの言葉を失ってしまった、祈る気力をなくしてしまった信徒の隣に座って静かに語りかけています。「祈るなら、ちょっと待たねばなりません」

私たちもそうだと思うのです。私たちの生活には色々な問題があります。苦しみがあります。だからこそ、願い、心からの想いがあります。それを主なる神に申し述べます。「アッバ、お父ちゃん、お願いです!」。受験を控えている人なら、志望校に受かり人生を切り開きたいと願うでしょう。会社に勤めている人も、仕事についての願いがあるでしょう。人間関係に悩む人は道を示す言葉を求めるでしょう。体調がすぐれない人、病に苦しむ人は病気を癒して頂きたいと思う。願い事は様々、それぞれにみ前に心を注ぎ出して祈ります。「お父ちゃん、願いをきいてください」そう願う気持ちははやる気持ちとなります。「すぐに願いを叶えてください」。でも、父なる神は、最もよいタイミングで物事をなさいます。私たちはその時を知りません。だから、私たちは待たねばなりません。祈りつつ待つのです。

祈りつつ待っている間、不思議なことです、私たち自身が変わられていきます。深いところから変わられていきます。先程、詩編130篇を読みました。深い絶望の淵から神を見上げて叫びをあげた詩人。ですが、五節で語調がガラリと変わっています。そうです。詩人は変えられたのです。「耳を傾けてください」と焦りにもにて叫ぶ思いで神をみい上げた時、変えられました。絶望に悲痛な叫びをあげる者から、神に希望をおく者へと変えられたのです。まさに先程の詩集のタイトル「あなたが祈るとき、神はあなたの中で息をなさる」とあるように、詩人の内に住む神が息をしてくださり、詩人の魂をつくりかえてくださったようです。だから、私たちは期待しつつ待つ事ができます。祈りは、神との深い交わり。私たちは、人との交わりで大きく変えられることがあるように、父なる神との交わりの中で、祈りの中で、確実に変わられていくのです。

9 祈りは呼吸

最後に、八木重吉という信仰に生きた詩人の「天にいます」という詩を紹介します。
てんにいますおんちちうえをよびて
おんちちうえさま
おんちちうえさまと となえまつる
いずるいきに よび
入りきたるいきに よびたてまつる
われは みなをよびまつるばかりのものにてあり

私たちをこよなく愛する神を、呼吸するごとくに、「アッバ、お父ちゃん」と呼び求め、この一週間も生きていきたいと切に願います。その時、霊なる神が私たちの内で呼吸してくださり、私たちは、主イエスと共に歩むことができます。「祈り」を与えてくださった父なる神に感謝したいと思います。